

# チェンバレンの数詞研究

— “A Handbook of Colloquial Japanese” の改訂を中心として —

高 橋 知 也

## はじめに

日本語の数詞は西洋語の数詞と異なった面が多くあるため、西洋人の日本語研究者によって詳しく記述された。バジル・ホール・チェンバレン（自署チャンブレ、Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）はその代表的な一人であり、著書“A Handbook of Colloquial Japanese”（以下 HCJ と略）はその後の日本語研究にも影響を及ぼした。

HCJ は初版から第4版まで著者自身によって改訂が行なわれた。各版の発行年は初版1888年、2版1889年、3版1898年、4版1907年である。同書は理論編と実用編の2部構成になっている。本稿では数詞を扱っている理論編の第6章の改訂を詳しく調査し、同著者の他の著作における数詞に関する記述との関連を考察した。依拠した本は初版と4版が国立国会図書館蔵書、2版がKaiser[編]（1995）第8巻所収復刻版、3版が国際交流基金本部図書館蔵書である。

## 1. HCJ 第6章の改訂について

HCJ の改訂については、金子（1991）、大久保（2002）という先行研究があるが、第6章に的を絞った詳しい報告はない。

### 1. 1 第6章の構成

第6章 THE NUMERAL は¶146から¶174までで、本書の理論篇全体に及ぶ特徴として、改訂が重ねられても節の順番と内容は著者の意向に基づいて変えられなかった。本文の小見出しによると¶146から¶156までが「Cardinal Numbers」、¶157から¶165までが「Auxiliary Numbers」、¶166から¶174までが「Ordinal, Fractional, etc., Numbers」である。2版から4版までの目次を見ると、以下のように各節の内容が更に詳しく説明されている。

- ¶146 General Considerations
- ¶147-151 Native Numerals
- ¶152 Chinese Numerals
- ¶153 Letter-Changes of Chinese Numerals
- ¶154-156 Sundry Peculiarities of Numerals
- ¶157-160 Chinese Auxiliary Numerals
- ¶161 Native Auxiliary Numerals
- ¶162 Counting of human beings
- ¶163-165 Interrogative Numeral Words
- ¶166 Ordinal and Fractional Numbers
- ¶167-172 Counting of Time
- ¶173-174 Miscellaneous Numeral Locutions

## 1. 2 改訂の詳細

節ごとの改訂の様子を下にまとめると、以下の通りである。ローマ数字で版を示し、変更がなかった場合は×を、句読点や発音符号などの些細な変更だけの場合は○を、語句の入れ替え・追加・削除を伴うような大きな変更は◎で示した。

節番号 (Ⅰ→Ⅱ・Ⅱ→Ⅲ・Ⅲ→Ⅳ) :

¶146 (×・×・×) ¶147 (○・○・○) ¶148 (○・○・○) ¶149  
 (×・×・×) ¶150 (×・×・×) ¶151 (◎・×・○) ¶152 (◎・◎・  
 ◎) ¶153 (◎・○・×) ¶154 (◎・×・○) ¶155 (◎・◎・◎) ¶  
 156 (○・○・○) ¶157 (◎・×・×) ¶158 (◎・×・◎) ¶159  
 (◎・◎・◎) ¶160 (◎・◎・◎) ¶161 (◎・◎・◎) ¶162 (◎・  
 ◎・×) ¶163 (○・◎・◎) ¶164 (○・×・×) ¶165 (◎・◎・◎)  
 ¶166 (◎・◎・◎) ¶167 (○・◎・◎) ¶168 (◎・◎・○) ¶169  
 (◎・×・×) ¶170 (◎・◎・×) ¶171 (○・◎・○) ¶172 (◎・  
 ◎・◎) ¶173 (◎・◎・◎) ¶174 (◎・◎・◎)

第6章の総ページ数は19ページで、この数は初版から4版にいたるまで変わっていない。それでも、上に見えるように常に改訂が加えられている。そのほか、初版から3版にかけては、巻末に“ADDITIONS AND CORRECTIONS”が設けられており、初版で2点、3版で1点、数詞に関する項目があった。

## 1. 2. 1 助数詞

版を重ねるに従って、助数詞の定義に変更が加えられたり収められている助数詞が変わったりしている。助数詞に関する主な改訂をまとめると、次のようになる。

(I → II)

## ○定義の改訂

¶159

[*fuku*] (various meanings;) for scrolls, sips of tea, whiffs of tobacco.  
→ (various meanings;) for scrolls, sips of tea, whiffs of tobacco, and doses of medicine.

[*hon*] for cylindrical things, such as sticks, trees, fans, newspapers rolled up to be posted, etc. → for cylindrical things, such as sticks, trees, fans, pens, bottles, newspapers rolled up to be posted, etc.

[*ka*] for a few things that have no other auxiliary numeral specially appropriated to them, especially for times and places. → for a few things that have no other auxiliary numeral appropriated to them, and especially for times and places.

[*mei*] *nin* is more genuinely colloquial. → *nin* is more genuinely Colloquial.

¶161

[*mune*] for houses and any sets of buildings included under one roof.  
→ for houses and any groups of buildings included under one roof.

[*soroe*] for sets of things of like nature, e.g. clothes. → for sets of things of like nature, such as suits of clothes.

[*toma*] for godowns (fire-proof store-houses) . → for godowns (store-houses) .

## ○注釈等の追加

¶157

It is this kind of words which, in Japanese grammar, are termed “auxiliary numerals.” → Compare also the Pidjin-English “piecey,” in such expressions as “one piecey man,” “two piecey house,” etc. Words of this kind are, in Japanese grammar, termed “auxiliary numerals.”

¶159

[*hai*] N.B. Ip-pai also means “full.”

¶161

N.B. Things having no special auxiliary numeral appropriated to them are counted by means of the native Japanese numerals *hītotsu*, *fūtatsu*, etc.; thus *tamago hītotsu*, “one egg;” *momo tō bakari* “about ten peaches.” Even things provided with a special auxiliary numeral sometimes replace the latter by *hītotsu*, *fūtatsu*, etc., in slipshod talk.

(Ⅱ → Ⅲ)

○定義の改訂

¶159

[*hai*] for cupfuls and glassfuls of any liquid. → for cupfuls and glassfuls of any liquid; also for loaded junks or steamers.

[*ka*] (*ik-ka*, *ni-*) *ka*, → (*ik-ka*, *ni-*) *ka*, sometimes *ko*; …, and especially for times and places → …, more, however, in the bookish style than in genuine Colloquial

[*sō*] for boats and ships → for vessels

[*soku*] clogs, and boots → clogs, boots, etc.

[*to*] for some few quadrupeds, such as horses and cattle. But it is safer to use *hiki* in all cases. → for horses and cattle; but *hiki* may also be used.

¶161

[*suji*] for rope-like things. → for towels and for rope-like things.

[*tomai*] godowns (store-houses) → godowns

○助数詞の削除

¶159 [*kyaku*][*ko*][*men*]

○助数詞の追加

¶161 [*kabu*][*ma*]

○注釈の追加

¶161

Purists, too, sometimes employ bookish auxiliary numerals now scarcely intelligible to the uneducated, as *kagami ichi-men*, “one mirror” (lit. mirror one surface), *isu ik-kyaku*, “one chair” (lit. chair one leg), where ordinary speakers would simply say *kagami hītotsu*, *isu hītotsu*.

¶165

N.B. As the auxiliary numeral, so also does the Japanese equivalent of our word “pair” vary with the object to which it is applied. Thus people say / *byōbu is-sō*, “a pair of screens.” / *hanatate it-tsui*, “,, ,, ,, flower-vases.” / *hashi ichi-zen*, “,, ,, ,, chopsticks.” / *tori hīto-tsugai*, “,, ,, ,, fowls,” etc.

(Ⅲ→Ⅳ)

○定義の改訂

¶159

[*wa*] for birds. → for birds, also for hares.

¶161

[*kabu*] for shrubs. → for shrubs, plants, and (business) shares.

○発音の改訂

[*soroe*] → [*soroi*]

## 1. 2. 2 億・兆

億と兆については、4版になって初めて現代と同じ数値になっている。HCJ¶152における億と兆に関する記述の変遷は以下の通りである。

(Ⅰ～Ⅲ) There is a term *oku* meaning 100,000, and a term *chō* meaning 1,000,000; but they are scarcely ever used, being almost always replaced by multiples of *man*, as in the examples just given.

(Ⅲ) [ADDITIONS AND CORRECTIONS] Page 104, line 10, and Vocab.s.v.— Some modern authorities take *oku* in the sense of “one hundred millions,” and *chō* in the sense of “one oku of oku,” i.e. apparently 10,000,000,000,000,000.

(Ⅳ) There is a term *oku* meaning 100,000,000. Multiples of *man* serve for lesser numbers, as in the last examples given.

## 1. 2. 3 四と七

四と七については「よん」や「なな」という読み方が漢語数詞のように使われることがある。HCJにおけるこの問題の記述について、安田(2002)は初版と2版について言及している。本稿では3版と4版についても調査した。¶

155における記述の変遷は以下の通りである。

(I) Usage plays various freaks with the numerals. Thus the Chinese numeral *shi*, “four,” which is considered unlucky because homonymous with *shi*, “death,” is in many connections replaced by the equivalent Japanese numeral *yo*, thus:

*yo-nin*, “four persons” (*shi-nin* means “a corpse”).

*ni-jū-yo-ban*, No.24.

The Chinese *shīchī*, “seven,” is sometimes replaced by the Japanese *nana*. This is done for clearness’ sake, as *shīchi* is easily mistaken for *shi*, “four.” Thus tradesmen will often say *nana-jis-sen*, instead of *shīchi-jis-sen*, “seventy cents.” But this is never either necessary or elegant.

(I → II) in many connections → in many contexts; thus → for inatance; easily mistaken for *shi* → easily confounded with *shī* ほか些細な改訂

(II) N.B. The vulgar sometimes go a step further, corrupting the *yo* into *yon*. Thus they will say *yon-jū*, instead of *shi-jū*, “forty.”

(II → III) The vulgar → Colloquialism; they will say → people may say; The chinese *shīchi* → Chinese *shīchī*; the Japanese → Japanese

(III → IV) tradesmen → tradesmen and accountants; But this is never either necessary or elegant → 削除

四については、2版で「庶民」(the vulgar) が四を「よん」と崩して言うことが初めて述べられるが、それが3版になると「庶民」が「話しことば」(colloquialism) に変わり、この間の一層の普及を感じさせる。

七については、四版になって削除された一文から、違和感がなくなるほどに「ななじっせん」などの言い方が広まったらしいことが窺える。

## 2. 他の著作から見た HCJ 第6章の特徴

チェンバレンには HCJ 以外にも『日本小文典』(以下『小』と略、文部省編

輯局, 1887, 国立国会図書館所蔵) や“Simplified Grammar of the Japanese Language (Modern Written Style)” (以下 SGJL と略, 初版:1886, 改版:1924) といった日本語に関する著作がある。また漢字の入門書として『文字のしるべ』(初版:1899, 2版:1905) がある。数詞の記述に関して、それらと HCJ を比較して考察したい。

## 2. 1 数詞の位置づけ

数詞の文法上の位置づけに関して HCJ の ¶146 にこうある。

In European grammars the numerals are generally disposed of in a few lines, as forming a mere subdivision of the adjective. In Japanese the numeral is rather a species of noun, and a species of noun with marked peculiarities of its own, necessitating its treatment as a separate part of speech.

これに先立つ第1章 INTRODUCTORY REMARKS の ¶9 には、もっと割り切って、“The pronoun and numeral are simply nouns.” とある。このことから、HCJ において、チェンバレンは数詞を名詞の下位分類として扱っていることが分かる。

これに対して、SGJL には数詞の文法的な位置づけに関する記述が見当たらない。『小』では次のように書いて、数詞を独立の品詞として扱っており、HCJ と食い違っている。(p. 3)

日本語にハ、働き辞と働かざる辞との二種あり、働き辞ハ、形容詞、働詞の二種に分ち、働かざる辞ハ、実名詞、代名詞、副詞、接続詞、数詞、間投詞、関係詞の七種に分つ、それ故に、我国にてハ、辞に九品の詞ありといふ、

『小』は西洋人が日本人のために日本語の文法書を出したということで反響を呼び、程なくして谷千生『ビー・エッチ・チャンブレン氏日本小文典批評』(1887) が発表された。この著作の中で谷は「数詞ハ何の仔細も無くものを算ふる詞なればかく品詞のうちに挙げずとも宜しきものなり」(p. 18) と述べて、数詞を独立の品詞として扱うことを批判している。

現在の文法研究でも、通常数詞は名詞の一種とされている。上でみた通り、HCJ では数詞が名詞の下位分類とされており、西洋人のためには特別な取り扱いが必要だということで独立の章が立てられたと説明されている。『小』と HCJ の違いと谷の著作との関連は明らかでない。

## 2. 2 助数詞

加藤（1991）はチェンバレンの三文典すなわち、HCJ・SGJL・『小』のそれぞれに収められている人称代名詞の違いを分析している。表1に、人称代名詞の違いに加えて、助数詞の違いをもまとめた。HCJとSGJLは、それぞれ初版である。

表 1 三文典における人称代名詞・助数詞

	三文典共通	SGJL・『小』	SGJL・HCJ	『小』・HCJ	SGJLのみ	『小』のみ	HCJのみ
一人称代名詞	わたくし 拙者 僕 小生	われ			それがし おのれ 臣 予 われら われわれ わたくしども 拙者ども 臣ら 予ら 我輩	僕ら わ(古語)	おれ わし わたし おら
二人称代名詞	君 陛下 閣下	なんじ		あなた 手前	貴下 足下 君達 足下達 なんじら	な(古語) きゃつ 君ら	そのほう お前 お前さん 貴様 あなたさま 先生 旦那さん
助数詞	か(箇) けん(軒) さつ(冊) すじ(筋) そろう(揃) ちよう(挺) とまえ(戸前) にん(人) はい(杯) ひき(匹・疋) ふく(幅・服) ほん(本) まい(枚) めい(名) わ(羽)	つう(通) ふう(封)	こ(箇) そう(艘)	くみ(組) しゅ(首) だい(台) とう(頭) はしら(柱) ぶ(部) めん(面)		おり(折) かさね(重) こし(腰) ざ(座) そう(雙) ながれ(流) はり(張) ふり(振) もん(門) りよう(輛)	きゃく(脚) じよう(畳) そく(足) むね(棟)

人称代名詞の分析からは各文典に以下のような特徴が認められる。(加藤1991:227-231の要約)

### ○SGJL

・一人称代名詞は、他の三文典に比べ、はるかに多数の語を扱っている。文語文典なのでこの書だけにある語が文語形であるのは当然だが、複数形が挙げられているのは、それらが書簡文に使用される代名詞だからである。

・二人称代名詞は、外国人が明治の書き言葉として知っておくべき実用の語を列挙している。それらは書簡に用いられたと思われる。



## ○『小』

- ・一人称代名詞は、日本人を対象にした文語文典なので啓蒙的な意味で羅列する必要はなかった。
- ・二人称代名詞は、理論を説明するために、古語や俗語もそれと断った上で示す必要があった。

## ○HCJ

- ・一人称代名詞は、全部で8語と少ない。唯一の口語文典であることから、当然、口語の代名詞が多く含まれている。
- ・二人称代名詞は、口語のものが挙げられているが、「先生」「旦那さん」までも代名詞としていて、口語文典とはいえ柔軟な扱いである。

以上のように加藤（1991）は一人称・二人称の代名詞の比較から、チェンバレンの3種の文典が、それぞれ異なった性格を備えていることを述べているが、助数詞についても分析すると以下のようなことが言えるのではないか。

- ・SGJLは文語文典であり、書簡に用いる実用的な助数詞が厳選されている。
- ・『小』は日本人を対象にしており、雅語的な和語助数詞を多く収めている。
- ・HCJは口語文典であり、日常的に用いられたと思われる助数詞が多く収められている。

## 2. 3 億と兆

億と兆はHCJの4版になって初めて、現在と同じ数値が与えられている。

SGJLの場合、大きい数は10,000までである。『小』には次のような記述があるものの、億や兆がどのような数値なのかは示されていない。(p. 21)

本数詞に二種あり、一は、我国固有の数にして、ひとつ、ふたつ、みつ等より、もゝ、ち、よろづに至るまでをいひ、一八支那より来りたる数にて、一、二、三等より萬、億、兆に至るまでをいふ、

それぞれの漢字について『文字のしるべ』（初版）では次のように記されている。億は100,000であり、兆には数詞としての記述がない。

-2150. 億 oku, “a hundred thousand” (from a “man” and “thought,” to indicate a number beyond the power of thought to conceive). (初版 p. 393)

-1183. 兆 chō or kizashi, “an omen.” The original form [甲骨文字]

represents the lines on a tortoise-shell when scorched, as in the ceremonies of ancient Chinese divination. (初版 p. 216)

これらの記述は2版でも変わっていない。2版では、それぞれの漢字番号が億は2107(p. 464)に、兆は1196(p. 234)に変わっているにすぎない。ただし、兆の甲骨文字の字形が初版と2版とでは異なっている。

## 2. 4 四と七

四と七の特殊な発音について『小』は触れていないが、SGJL には次のような記述がある。しかし、七については触れていない。(初版 p. 20, 改版 p. 19)

Japanese and Chinese numerals cannot be used together. *Shi*, “four,” is however often replaced by *yo*, the native Japanese word, as in *jū-yo-nin*, “fourteen persons”; *ni-jū-yokka*, “the 24th day of the month.”

## おわりに

本稿では西洋人の代表的な日本語研究者であるチェンバレンの数詞に関する研究に注目して調査した。HCJ の改訂や他の著作との関係を見てきたが、日本語の数詞がどのように研究されてきたのか、チェンバレンだけでなく他の西洋人および日本人による研究の変遷やそれら相互の関係について、今後明らかにしていきたい。

## <参考文献>

- Kaiser, S. [ed.](1995), *The western rediscovery of the Japanese language*; 8v., Surrey : Curzon, Richmond
- 久保恵子(2002)「B.H.チェンバレン『日本語口語入門』改訂に見る日本語の変化」『日本近代語研究3』ひつじ書房
- 加藤信明(1991)「チェンバレン『簡約日本文典』の位置」『日本近代語研究1』ひつじ書房
- 金子弘(1991)「Handbook of Colloquial Japanese の諸版について」『日本近代語研究1』ひつじ書房
- 高橋知也(2002)「西洋語資料における数詞表現」第193回近代語研究会発表予稿
- 安田尚道(2002)「シ(四)からヨンへー4を表わす言い方の変遷―」『青山語文』32号